

近況・随筆

随想 胃壁のあそび

浅海重夫

正月に卒業生諸姉からいただく賀状は毎年の楽しみのひとつである。卒業以来全く会うことのない人からも欠かさず届いてくる年賀状、時々はあるにしても話題に出なかったようなご家庭の近況や時事評論めいた短文を添書きしたもの、ワンパターンのようにも何とはなく気持のあふれた1枚1枚のはがきに心とむ思ひである。それはその人たちの在学中の頃を回想させ、ついでにその当時の自分に若返らせてくれる作用をもつからである。

教職にあるおかげで気持の上ではとしを取らずに暮らすことができそうだが、身体は確実に老化してゆく。この数年来胃の精密検査を年1度ずつ受けるようになり、昨年は始めて胃カメラを飲みこんだ。胃の老化は20才から始まるといわれるが、それは胃壁の粘膜の肥厚または萎縮という現象を指すらしい。私は数年前、びらん性胃炎をまず定期検診、ついで精密検査で確認されたが、その時すでに治癒像であるから今病気というわけではない、しかし粘膜にびらんの痕や萎縮があるとガンができた時に早期発見が遅れるから、毎年追跡調査をした方がよいとのことであった。今年の精検でびらんが見られなくなっているので、今後は精検の必要はないでしょうとの医師の診断を得た。医師は7枚位の胃のX線写真フィルムを見せながら説明してくれる。患者の私も毎年のことで写真に馴れてきたので、この辺のモヤモヤやギザギザはかまわないんですかなどと質問してみる。すると医師は、胃が曲玉(まがたま)のように曲って外側に凸出した部分の内壁を指して、こちら側にはギザギザがあってもよい、むしろ胃は伸縮してその機能を果たす器官だから普段(胃に内容物が入っていない時)は胃壁というのはたるんでいる、とく

に曲玉形の外側に湾曲した部分の壁はたるみがないければならない、まあ道具でいえばあそびのようなものですよと云う。なるほど合点がいった。瀬度高く使用する道具は酷使に耐え急激の緊張に対処するために適当なあそびが必要である。人間という道具もそのとおりで時に休養し弛緩することもあった方がよいとの教訓とうけとった。

医師の話はつづいて、ただし湾曲の内側の部分に凹凸ができてしまうと要注意である、ついでながらあなたのように精検で一応病状はないとされた人が、次の定期検診で又要精検と診断されないためにはコツがある、X線撮影の直前に飲む発泡剤を、一度にのみこまずに3度位に分け、なるべく空気を沢山のみこむようにして(つまり泡を食って)、飲むとよいと教えてくれた。つまりカラの胃をできるだけふくらませることによって、単なるあそびにすぎないシワが必要以上に大きく写らないようにするのだそうだ。ただし、始めて定期検査をうける場合は、多少凹凸がよく出る位の写真うつりにして、精検に廻されて確実な診断をうける機会を作る方がよいといえよう。

X線検査は写真判読の方法によるので、経験を積んだ複数の医師が詳細に患者の写真をしらべ、討論しながら診断を下しているようである。とは云えびらんや初期ガンが見のがされることが全くないとは云えないだろう。写真のうつりの良否や腫瘍などの発生場所如何にもよるといふ。願わくは胃壁の各部の凹凸像をみなあそびだと楽観的に診断してしまわないでもらいたいものだ。ともかく今年はひとつの気がかりな問題が解消したので、来年の年賀状は一そう楽しく読ませてもらえそうである。